

# 母と言葉

—アルベール・カミュの初期作品世界— (7)

鈴木忠士

まえがき

第1章 アルジェリアの母と息子 …… (未発表)

第2章 『苦悩』との出会い—〈読む〉から〈書く〉へ

I はじめに

II 『苦悩』の梗概

III 『苦悩』と「家族の悲劇」

A 母の肖像—テレーズとカトリーヌ

B 母と夫・恋人・息子

(1) 母とその夫

(2) 母とその恋人

(3) 母とその息子 …… (この項の終りまで第28巻第1号)

C 息子と母・母の恋人・父

(1) 息子の肖像

(2) 息子と母・母の恋人

(3) 息子と父 …… (この項の終りまで本号)

第3章 『裏と表』論

I テクストの生成過程 …… (この節のみ第19巻第4号)

II 深層のテクスト

A 母のイメージと息子の母親に対する関係

…… (この項の、途中まで第20巻第2号、  
途中から終りまで第26巻第3号)

B 祖母のイメージ

C 父のイメージ …… (この項の終りまで第27巻第1号)

III 『魂のなかの死』と『生きることへの愛』

A 『魂のなかの死』 …… (この項の終りまで第27巻第3号)

## 第2章 『苦悩』との出会い

### III 『苦悩』と「家族の悲劇」〔続〕

#### C 息子と母・母の恋人・父

ここでは、『苦悩』の作中人物である息子ジョルジュの肖像、および彼の、母・母の恋人・父、それぞれとの関係と、実在の作家アルベール・カミュの幼少年期の肖像、および彼の、母・母の恋人・父、それぞれとの関係を対照して、両者の間の「対比関係」を調べてみる。

#### (1) 息子の肖像

ジョルジュ少年の容貌については、まず、同じ年頃の男の子に比べて「ほっそりして蒼白い」<sup>(10)87)</sup>、「大変かわいかった」<sup>(32)</sup>とされている。それから数年後には、「日に焼けた黄金色の肌」、「がっしりとした形の顎」、「もうすでに官能的な唇」<sup>(173)</sup>が注目され、髪は「金髪」<sup>(177)</sup>である。「18歳になったら、この子はどんなに美しくなることか」<sup>(173)</sup>とされている。ただ、「大層デリカ繊細」<sup>(134)</sup>に見えたとも。

ロットマンの『伝記 アルベール・カミュ』(以下、『伝記』と略記)によると、アルベール少年も、幼稚園のときから「明らかに彼は、同じ年の子供に較べると、ひ弱だった。それで遊び仲間たちは、彼に対しては、庇護者のように振舞った。」リセに入ってからその点は変らなかつたようである<sup>88)</sup>。また、成人して後のことだが、その「あけすけな官能性を湛えた口」<sup>(89)</sup>が外貌の上で目を引く特徴のひとつとして指摘されてもいる。

ジョルジュ少年の性格については、「きまぐれで神経質、しかし意志的でまっすぐな性格」<sup>(173)</sup>であると言われている。また、「素朴であると同時に墮落した、〔……〕貪婪であり、かつ倦みはてている魂」<sup>(90)</sup>をもち、「感じやすく、昂奮しやすい」<sup>(18)</sup>、「心の底はひどい傷をうけていた」<sup>(102)</sup>という。このような性格傾向は、必ずしもジョルジュ少年固有のものとは言えまい。「感受性が激しく昂まる年齢」<sup>(101)</sup>としての思春期にある少年たちが大なり小なり示す特徴でもあろうから。

ジョルジュ少年の性格で特異なのは、まず、その「不安」<sup>アングワッス</sup><sup>(17)</sup>の強さであり、それと相関的な、母親離れの時期がきても母の懐の「ぬくもりへの欲求」を「保持していた」<sup>(11)</sup>ところであろう。「一瞬不安にとらわれると、それが晴れるのに、しばしば一週間かかった」し、家の中で「たったひとりであるのだと一瞬思いこむと、恐怖のあまり死にそうになって、二、三日母親の足もとを離れなかった」というように。反面、「怖い思いをすることに強い喜びを覚えて」<sup>(17)</sup>もいた。これは普通の子供も示す傾向ではあるが、それと相関的な、他方の「不安」の強さを考え合わせると、この「喜び」はマゾヒズムの色合いを帯びるまでに「強い」<sup>テリープル</sup>「恐るべき」ものであったろうと推測される。

だが、なによりもジョルジュの性格を際立たせているものは、その身を浸して晴れることのまれな、深い抑うつ気分であるだろう。彼は父の死後、「しばしば涙にぬれて光る母の顔以外の顔を知ら」<sup>(11)</sup>ずに、「悲哀」<sup>トウリステス</sup>と愛の雰囲気の中で成長した」<sup>(14)</sup>のだった。オルガを失ったときは、「不幸な恋人」として、「悲哀が、影のように、彼の子供時代の上にひろがっていった。」<sup>(67)</sup>オットーに母を奪われて以降、「メランコリー」<sup>(102)</sup>に沈んでいた。両手をこすり合わせると「死体の臭い」がし、「死のことを考えた。」<sup>(139)</sup>そして、「私生児」を産むと母に聞かされてからは、「しょっちゅう死にたくなかった」し、「彼の小さな心は永久に死んだようだった。」<sup>(184)</sup>

このような抑うつ傾向に加えて、それと親和的な、「恥」の観念と強力な

超自我が、母親の場合にも増して、ジョルジュの心性のうちに認められるように思われる。母親が「私生児」を孕んでいると知ったとき、「全身<sup>オント</sup>恥辱にまみれた」<sup>(136)</sup>が、その恥の念の強さは、「窓から身を投げ出したかった」<sup>(135)</sup>ほどであった。そして、「意志的でまっすぐな」性質の彼は、母親の予感したとおり、彼女が「犯す最初の過ちにも、彼女にとって容赦のない残酷な裁き手になる」<sup>(78)</sup>のである。ここに、先のマゾヒズム的傾向と表裏のこととしてのサディズム的傾向の萌芽を見てとることもできよう。

ジョルジュの心性を織り成すこれらの特徴は、第1章〔未発表〕において伝記的事実をもとに推定されるアルベールの心的世界の構成要素でもある。すなわち、「不安」、「ぬくもりへの欲求」、「メランコリー」、サド・マゾヒズム的傾向、「恥」の念の強さ、「死」の観念への親しみ、など。

ジョルジュ少年の生活振りもかなり特異である。「孤独とひとり静かにする遊びを好んだ。彼は同じ年頃の男の子たちと一緒にだと楽しまなかった。そしてリボンやレースで何時間も遊んでいるのだった。」<sup>(11)</sup> 友だちと遊ぶときも、「男の子たちよりもはるかにしばしば女の子たちと遊んだ。」そして、「屋根裏部屋」<sup>(31)</sup>が彼の主な遊び場所だった。『伝記』を見る限り、アルベールがジョルジュのように、「女の子のように内気」<sup>(11)</sup>で、家に閉じこもりがち、ということはなかったようである。大体、「手荒に」<sup>(90)</sup>世話してくれた祖母をはじめとして家族5人が住む「アパルトマンの間取りは3室と台所」<sup>(91)</sup>だけで、「リボンやレース」はもちろん、ひとりで遊べる「屋根裏部屋」という「秘密の王国」<sup>(101)</sup>などありえなかった。アルベールの活動場所は家の外の世界であって、「仲間たちの大胆不敵な探険に加わらなかった」<sup>(92)</sup>としても、「級友たち」を彼の「話」で「喜」ばせることに長じ、またそれを楽しんでくれたのである<sup>(93)</sup>。

## (2) 息子と母・母の恋人

ジョルジュは「8歳」を過ぎてもなお母親の懐の「ぬくもりへの欲求」を

もちつづけた。そこには、彼の「大層繊細な」資質とともに、おそらくはそれ以上に、母親による「愛の玩具」<sup>(14)</sup>扱いが与っていたことであろう。ただ、「同じ年頃の男の子たち」に比べておくてであったとしても、彼の場合にも「男らしさ〔男性性〕」<sup>(31)</sup>が徐々に目覚めてはいったのであって、それが彼を「母の足もと」<sup>(17)</sup>を離れない「女の子のように内気」な男の子から「一人前の男」<sup>(29)</sup>へと変容させていくはずであった。リュシエンヌに対して示された「男らしさの最初のしるし」<sup>(31)</sup>がその第一歩であり、オルガを「母のしているのも忘れて、腕の中に抱きしめた」<sup>(60)</sup>のはその第二歩であった。それらは母親以外の「女」<sup>(32)</sup>に対する自然な関心、「愛」<sup>(58)</sup>の現われなのであった。ところが母親のほうは、息子が「一人前の男になり、彼女の愛から脱れていくのを妨げた」<sup>(28)</sup>のである。

こうして母親の「膝の間」<sup>(12)</sup>に拘束された息子は、母親に対してアンビヴァレンツな思いに引き裂かれることになる。一方では、「自分の母親の顔以外の他の人の顔を見るためなら、彼が行かないところなどあったろうか。」<sup>(70)</sup>だが他方では、母親を「この地上のあらゆるオルガより愛していることを示」<sup>(59)</sup>そうとし、「自分は母とぴったり一緒になって永久に生きていく定めなんだと思」<sup>(126)</sup>い込む。

そして、このような母親拘束の下に置かれた、つまり母を愛しつづければ自立が妨げられ、自立を試みれば「母の愛」を失う「不安」に責めさいなまれるという状況に置かれた息子が、自分は「身を守るすべもないままに、自分の母に見棄てられていると感じ」<sup>(130)</sup>るとき、自分にとっては母がすべてであると思こんでいたまきにそのときに、自分が「彼女にとって決して何ものでもなかった」<sup>(180)</sup>のだと悟られたとき、母に裏切られた息子「に可能な愛のすべて」が、「狂った母が彼らの孤独の最初の月日の間にむごたらしくも培ったあの愛が彼のうちに花開いた」<sup>(138)</sup>のである。それは、失われた「母と子の親密さ〔水入らずの関係〕」に代る「幾分敵意をはらむ無関心」<sup>(102)</sup>にとりまかれながら、しかも、母ひとり子ひとりの「家庭」という「孤島」か

ら脱け出す、「魔法にかかっていると想像される世界」<sup>(145)</sup>への出口を塞がれている「愛」なのである。

「思春期」<sup>(145)</sup>にさしかかった息子が母親拘束の下に置かれたとき、その母への「愛」は一般に近親相姦の色合いを帯びるといふ。ジョルジュの場合にも、その傾向は濃厚に見える。彼は母の恋人オットーに「嫉妬」<sup>(123)</sup>し、オットーが村を去っていくとき、「こんなふうには、唄いながら、彼〔ジョルジュ〕がこの世で愛しているすべてのものを彼から奪ってしまったこの男を殺したかった。」<sup>(186)</sup>

だが近親相姦的關係とは何か？ その本質は決して近親間の実際上の相姦行為にあるのではない。一般に近親姦の実行は、愛と憎しみのアンビヴァレンツのなかで、己れの分身と化した相手から離れることができないという共生的な関係を、いわば物質的に保障する意味をもつものでしかない。ジョルジュの場合もその典型的な例である。「彼がこの世で愛しているすべてのもの」とは母親のことだが、誰が母を「この世で愛しているすべてのもの」にしたのか。「彼から彼を喜ばせるすべてのものを奪った」母そのひとではなかったか。そしてまた、オットーに「奪」われるそれ以前に、すでにジョルジュは「彼女にとって決して何ものでもなかった」のではないのか。オットーが「これら〔母と子〕ふたつの心の中にうがった深い溝、いやしようのない傷」<sup>(183)</sup>に先立って、オットーの現われる以前にすでに息子の「心の底は深傷を負っていた」<sup>(102)</sup>ではなかったか。ただ、「純粋な愛」<sup>(150)</sup>としての「母の愛」<sup>(30)</sup>、あるいは母子一体の「熱グラン・タムール愛〔大いなる愛〕」<sup>(102)</sup>の幻想が、「遷延する母子融合」（ジェイコブソン）の空想が、それを抑圧して意識下にとどめていたのであり、母の息子に対する「愛の玩具」扱いのかげに、母の心に潜む「幾分敵意をはらむ無関心」<sup>(102)</sup>を、母のオルガに対する「嫉妬」<sup>(126)</sup>のうちに、次いでオットーとの恋の囚になった母の「無関心」<sup>(90・123)</sup>を前にして、「突然心のうちにはっきりと悟った」<sup>(60)</sup>ではなかったろうか。

オットーへの殺意を抱くに先立って、母親への「憎しみ」と「嫌悪」が昂

まっていたのであり、「彼女〔母〕が死んで」いる姿を「想い浮かべる」<sup>(136)</sup>という潜在的な殺意までもがあったのだ。それは、「母親の庇護」<sup>(64)</sup>に名を借りた母親拘束の下で、母と子の幻想的な「水入らずの関係」から「身を守るすべもないままに、自分の母に見棄てられていると感じ」<sup>(130)</sup>る状況に突然身をさらされた者の「憎しみ」であり殺意である。そしておそらくは、幼児期から「母に見棄てられていると感じ」つづけてきた者の「憎しみ」と殺意の再燃である。さらには、己れの「男性性」の萌芽をすべて摘みとって、自立を妨げ、袋小路に追い込んだ者への「憎しみ」と殺意であるだろう。だからこそ、ジョルジュが、そして彼こそが、母親の「犯す最初の過ちにも、彼女にとって彼が容赦のない残酷な裁き手になる」<sup>(78)</sup>のであり、「私生児」<sup>(180)</sup>を産もうとする母を、「怒り」<sup>(179)</sup>のままに、「破局」<sup>(184)</sup>へとためらいも見せず追い詰めてゆくのである。

彼を「苦しめていた」<sup>(179)</sup>母を「罪ある女」<sup>(167)</sup>として「罰」<sup>(187)</sup>したいという思いがあるからこそ、オットーに母が捨てられた夜、その「あまりに不幸」な様子を目にしたとき、その「夜は、彼によれば、彼のすべての夜をあがなってくれたのだった」と、その「心を大きな平安が充たし」、「彼は幸福だった」<sup>(156)</sup>と言えるのであり、村全体の嘲笑の的になっていると分ったときに母が示した「発作は彼に嫌悪をもよおさせた」<sup>(169)</sup>のである。オットーを「殺した」と思う前に、母を「心の中で殺し」<sup>94)</sup>ていたからこそ、「母とぴったり一緒になって永久に生きていく定め」にあるジョルジュは「死体の匂い」を嗅ぎ、「死のことを考え」<sup>(139)</sup>たのである。母親が「私生児」を孕んでいることを知ってから、ジョルジュが母の「姿を目にするのにも耐えられないくらい彼女を憎んでいた」<sup>(184)</sup>とき、彼が「待っていた」という「破局」とは、結局のところ母の「死」<sup>(136)</sup>のほかにはないであろう。母の死へのこうした潜在的な願望があるからこそ、また、「彼はしょっちゅう死にたくなかった」<sup>(184)</sup>のものである。

オットーがふたりの間に割って入る以前に、すでに母と息子の中に「溝」

はうがたれていたのであり、その「溝」ゆえに「いやしようのない傷」<sup>(183)</sup>を負いつづけてきた息子が、「溝」を越えて再び母と出会う道は、「子と女が、共にのぼりつつ、再び出会おうとする、苦しみの丘」<sup>(185)</sup>の上にはかないのであり、母を「心の中で殺し」、そうすることでまた自らをも「心の中で殺し」、生きながらにしてふたりが「引き裂かれた亡霊」となり、「第二の死を待つ」<sup>(185)</sup>道しかないのである。

階段を転げ落ちる母親の悲鳴を耳にして駆けつけたジョルジュは、転落の際に負った傷であろう母の「こめかみ」の「血まみれの黒い穴」<sup>(187)</sup>を見ると、彼が「殺したかった」ドイツ人が引き返してきて、銃で母を撃ったのだと思ひ込んだようだ。ジョルジュは「煙」<sup>(187)</sup>と「炎の海」の中に「ドイツ人たち」<sup>(188)</sup>の幻影を見る。かつて読み耽っていた、「ドイツ人の制服を象徴する緑と、すべての人間の血を象徴する赤が支配的な挿絵入りの雑誌〔傍点は鈴木、以下断わりなき場合は同じ〕」<sup>(15)</sup>がジョルジュの脳裏に焼きついているからこそ、「赤や緑のランプ」<sup>(188)</sup>の放つ「緑の光」<sup>(17)</sup>と「赤い光」<sup>(153)</sup>の交錯する光景の中に戦場を幻覚し、「大砲」<sup>(188)</sup>の音を耳にするのである。

確かにこうした幻覚は、ジョルジュがオットーに抱く殺意に由来すると同時に、「この三年来ドイツに関するあらゆる卑劣なことどもを絶え間なくくり返し聞かされてきた」<sup>(78)</sup>り、「学校でも教理教育でもドイツの悪口をあまりに聞かされすぎていた」<sup>(104)</sup>結果、「ドイツ」や「ドイツ人」に対する盲目的な「嫌悪」<sup>(78)</sup>が培われてしまったせいでもある。だが、この幻影の戦場で、「炎の海辺」でジョルジュが「眠りにおちた」<sup>(188)</sup>のは何故か。それは間接的な自殺ではなかったか。「ママ、ママが死んだりしたら、ぼくも死んじゃう〔自殺する〕からね」とは「ひとつの嘘」<sup>(178)</sup>のはずであったが、「自分は母とぴったり一緒になって生きていく定めなんだと思っていた」その母が死んだとすれば、息子の「自殺」は当然の帰結であるだろう。

とすれば、ジョルジュが「炎の海辺」で、「眠りにおちた」というとき、むしろそこには「大きな平安〔安らぎ〕」の気配が感じとれさえしよう。彼は

やっと「苦しみの丘」をのぼりつめて、母に「再び出会」うことができるのだし、母はもう「何ものにも構わず、誰にも会いはしな」<sup>(157)</sup>いのだから。

さらに言えば、息子の心のうちに「破局」への期待があった以上、母を「引っぱ」て階段から転げ落とした「闇の中の手」<sup>(187)</sup>とは、ジョルジュの心の「手」ではなかったろうか。母への殺意が実現されたからこそ、息子は自らを「罰」<sup>(187)</sup>するために、死に就くのではないか。もしそうなら、攻撃してくる「ドイツ人たち」という幻影も、母に向けられた殺意をはらむ根深い「敵意」<sup>(138)</sup>の投影であり、母と子の「孤島」に封じこめられている息子にとっては母と子の世界以外の「世界」<sup>(15)</sup>は現実には存在しないのだから、母即世界に向けられた原初的な、限界を知らない敵意の投影でもあるということになる。

さて、アルベールもまた、第1章での推定によれば、「身を守るすべもないままに、自分の母に見棄てられていると感じていた」<sup>(130)</sup>のであり、一方における母親への狂おしいまでの愛着と、他方での殺意にまで昂まる敵意との葛藤を「私の秘め事」<sup>95)</sup>の中核にかかえていたのである。

母親の「恋愛事件」を知ったとき、アルベールは、ジョルジュの母に向けた「軽蔑」<sup>(150・173)</sup>と、その「傷つけられた子供の憎しみ」<sup>(164)</sup>を共有し、「そんなことのために父は死に、自分は《国家保護戦災孤児》になったのだ。フランス国民に養われる身に」という叫びと、その叫びとともに「(全身が)まみれ」る「恥辱」<sup>(136)</sup>を共有し、母親への「嫌悪」とそれゆえの「頑なに押し黙った」<sup>(138)</sup>態度を共有し、「恥かしさ〔恥辱〕」と「憎しみ」と、「怒り」<sup>(179)</sup>の爆発を、「この上なく卑猥な侮り言葉」<sup>(181)</sup>を共有したことであろう。アルベールもまた、心の中で「苦しみの丘」を母と「共にのぼ」ったのであり、その「苦悩の頂」<sup>(180)</sup>において、母の恋の相手を「殺した」<sup>(186)</sup>いと思う以上に、自ら母に供える「犠牲」<sup>プロフ</sup>〔餌食〕<sup>(14)</sup>、「殉教者」<sup>(179)</sup>となり、かつ母を「心の中で殺し」ていたのではないだろうか。「彼女の踵が階段の踏み板に引っかかったのか、それとも闇の中の手が彼女を引っぱったのか？不注意の

刻——おそらくは罰の刻がやってきたのか？」(187)と『苦悩』が語るとき、それを読むアルベールの心の中で、喝采を叫ぶ者が確かにいたにちがいないのだ。

このように息子の母に対する関係においてこそ、ジョルジュの「世界」はまさにアルベールの「世界」であった。

ただ、このアルベールの「世界」は、『伝記』等が伝えるカミュの伝記的資料に基づいて私が想定した仮説的な、深層のテクストの内容をなすものである。伝記的事実としては、そのようなアルベールの心的「世界」を証し立てるものは一切ない。だが、カミュが『苦悩』との出会いの後に筆をとった『裏と表』およびその先駆形をなす草稿群の中には、ジョルジュの母に対する関係を想わせる件がいくつも見出せるのである。

たとえば、ジョルジュの母親がオットーと初めて情を交した夜の翌日の朝、ジョルジュが母親より早く目覚めたときの情景を語る一節(a)と、『貧民街の声』の冒頭に置かれた、「考えることをしなかった女」を中心とする情景を語る一節(b)とを対照してみよう。

(a) 「彼〔ジョルジュ〕は自分の周囲を見まわして、恐怖を覚えた。部屋の沈黙があまりに深かったのだ……」

薄暗がりの中に横たわっているこの大きな身体が〔……〕彼を戦慄させた。彼は死を思わないでは眠っている人を見ることができないのだった。彼は母の顔の上に目覚めの気配をうかがった。病気なのだろうか？ 彼はこんな表情を浮かべる母を見たことがなかった。彼は本当に恐怖を覚える。〔……〕そうだ、彼の母親は幸福そうじゃない。なぜ彼女はしばらく前から変わってしまったのか？ 数カ月前には、彼女は愛撫で彼をうんざりさせた——一瞬といえども彼のものとして与えられていない時はなかった。〔……〕今では、彼が話しかけても、彼女はもう話を聞いてくれさえしない……

彼女は誰のことを考えているのだろうか、もし彼のことでないとしたら？ たぶんお父さんのことだ、だからこんなに不幸な顔をしているんだ。」(98-99)

(b) 「家には誰もいない。〔……〕そこで、彼女は椅子にへたり込む。そして、<sup>うつ</sup>空けた眼で、寄せ木張りの床の溝を我を忘れて憑かれたように追っている。彼女のまわりでは、宵闇が深くなり、その中で、こうした嘆くような頑なな沈黙は救いようのない悲嘆に染まってくる。彼〔子供のひとり〕がもしこのときに入ってくると、骨張った肩のやせ細った影法師がくっきりと見えて、彼は立ち止まる。恐<sup>おそ</sup>いのだ。〔……〕だが、この動物的な沈黙を前にして、なかなか泣くことができない。彼は自分の母親を憐れんでいる。が、それが彼女を愛するということだろうか。彼女はこれまで一度も彼を愛撫したことはない。それは、愛撫するすべも知るまいからのだ。そこで彼は、長い間、ただ彼女を見つめつづける。自分を他人と感ずると、自分の苦しみを意識する。彼女には彼の立てる物音が聞こえない。耳が聞こえないからだ。〔……〕激しやすいたちの子供は、母親への愛がどっと溢れ出すのが感じられるように思うのだ。そして、ぜひともそうあらねばならない。なぜなら、結局、自分の母親だからだ。

しかしまた、彼女は何を考えているのだろうか、いったい何を考えているのだろうか？ 何も、だ。外は、光と、ざわめき。ここは、夜の中の沈黙。』<sup>96)</sup>

「鎧戸」越しに「朝」<sup>(98)</sup>の光がもれてくる「薄暗がり」であるか、それとも「宵闇」の中であるか。そして、その中に母親が「横たわっている」か、それとも「椅子にへたり込」んでいるか。「大きな身体」をしているか、それとも「骨張った肩のやせ細った」身体であるか。また、息子を「愛撫」で「うんざりさせた」か、それとも「これまで一度も彼を愛撫したことはない」か。さらには、母親の「考えている」のは何についてかと自問した息子が、「お父さんのことだ」という答えをだすか、それとも「何もだ」とするか。一見したところ目につく、ふたつのテキスト間のこれらの相違点は、より本質的な、両者の類似点に目をとめるならば、付随的な事柄にすぎないと気付こう。

いずれにおいても、一つの部屋の中に、母親とひとりの幼い息子だけがいる。母親は意識を閉ざして、見慣れぬ無気味な「身体」と化し、子供は、母親の異形な「身体」と不可解な相貌に、そして母親の「沈黙」と部屋の「沈黙」に「恐怖」しながら、母親を見まもっている。また、いずれにおいても、子供は母親の「愛撫」の如何と、母親からの応答の欠如に苦悩し、母親の「考えている」のは「何」についてか、あるいは「誰」のことかと問う。もちろん、重要な相違点として、テキスト-(b)に見られるごとき、息子を拒む母親の「沈黙」を前にした息子が、翻って己れの「母親への愛」の性質を問うというような、子供の自意識の目覚めが、テキスト-(a)には認められないということはあるが。

さて今度は、オットーに棄てられて暗闇の中に横たわっていたテレーズとそれを見つけて介抱するジョルジュのことを、そしてそれに続く日々のことを描いている『苦悩』の一節(c)と、『裏と表』に収められている小説『肯定と否定との間』の中の、アルベールの母親の身に現実に起った事件をもとにしていると思われる、暴漢に襲われて倒れていた母とそれを介抱する息子のことを物語っている一節(d)を見比べてみよう。

(c) 「室内の静寂は底が知れなかった。子供は恐くなって、とび起きた。

〔……〕 やっと彼は、あずま屋の中で、黒い大きなマントを着て砂利の上に横たわっている母を見つけた。血が彼の手足から引いていった。〔……〕 彼女は答えなかった。そこで子供は、あの男が彼女を殺してしまったのだらうと思った。〔……〕

〔……〕

〔……〕 彼女には思考も意志もなかった。〔……〕 女は蒼ざめていた。彼女は何も言わなかった。彼女は厚い<sup>もや</sup>霧ごしに二つの光を、ランプの赤い光と暖房器の青い光を垣間見た。〔……〕 黒い列車が二つの信号の間を通った。それはジョルジュだった。まもなく煮えたぎる湯がぞっとするような騒がしい音を、夜間に駅を突き抜けてゆく大きな特急列車の音をたてた。〔……〕 床が北

風に吹かれて震動した。〔……〕

子供は彼女のそばにいた。彼女は醜く、年をとっていた。〔……〕

〔……〕それどころか彼女はまだこの世の人であろうか。彼女の目はどんな思いも浮かべていなかった。その目は、暖められ飲み物をのませてもらっている不幸な牝犬のそれだった。〔……〕

〔……〕

曙が鎧戸をそっと叩きにやってきたとき、ジョルジュはまだ大きく目を見開いていたが、テレーズはなぐり倒された獣のように深々と寝入っていた。』(153-155)

「それに続く日々の間、子供の魂の中に大きな平安が満たしていった。〔……〕

〔……〕

〔……〕女と子供は幾日も幾日も、まるきり他の人間の顔を見ないでじっとしていた。そしてこの孤独が彼らの回復期にある心には喜ばしいのだった。毎朝、彼らは牛乳ビン窓枠の縁に見つけた。そしてそれが、彼らがこの地上でふたりだけではないことを告げる唯一のものだった。』(156-157)

(d) 「問題のその晩、ひとりの男が彼女〔母親〕の背後に突然姿を現わし、彼女を引きずり込んで乱暴を働き、物音を聞いて逃げ去ったのだ。彼女は何も見なかった。そして気を失ってしまった。息子が着いたとき、彼女は寝ていた。彼は医者意見に従って、その夜を彼女の傍で過すことに決めた。彼は同じベッドの上で彼女と身体を並べて、夜具の上にじかに横たわった。夏だった。先ほどの事件の恐怖が暑苦しい部屋の中にまだ残っていた。足音が伝わってき、扉がきしむ音がした。〔……〕彼女は、彼の横で、もがき、うめき、時として不意に跳び起きた。〔……〕腕時計の上では、豆ランプの灯芯の焰が、三度くり返し踊りをおどっていた。彼らがこの夜どれほど孤立していたか悟ったのはずっと後のことでしかない。すべての人々を向うに

回して孤立していた。ふたり一緒に熱っぽい空気を吸っていたとき、《他人ども》は眠っていたのだ。この古い家の中で、このとき、すべてが虚ろに思われた。深夜の電車が、遠ざかりながら、人間たちに源をもつ我々の希望というもののすべてを、町のざわめきが我々にあたえる確信のすべてを浚<sup>さら</sup>っていった。〔……〕ときおり病人の怯えた唸り声が生ずる大いなる沈黙の園しか、もはや残ってはいなかった。彼は、いまだかつてこれほど疎外感を覚えたことはなかった。世界は崩壊してしまっていた。〔……〕もう何も存在してはいなかった〔……〕。自分が陥っていると彼には感じられる、病と死のほかには何も……とところが、世界が崩れ落ちてゆくそのときにすら、彼は生きていたのだ。そして、ついには眠り込んでしまいさえしたのだった。それでも、ふたり一緒にの孤独という絶望的で優に優しいイメージをやはりたずさえてゆきはしたのだ。』<sup>97)</sup>

上の(c), (d), 二つのテキストをひとつあたり対照してみたとき、晩「秋」<sup>(142)</sup>であるか、それとも「夏」であるか、母親が「棄て」<sup>(151)</sup>られたショックで「庭」<sup>(152)</sup>に「横たわっている」か、それとも「乱暴」されて「寝台」に「寝ていた」か、「子供」がまだ「11歳」<sup>(120・179)</sup>で母親と同じ「部屋」<sup>(152)</sup>で起き伏しを共にしているか、それとも「もう大きくなってい」て母親のところへ「呼ばれてやってきた」<sup>98)</sup>か、「母親のベッド」<sup>(63)</sup>と「子供のベッド」<sup>(138)</sup>に母と息子が別々に寝ているか、それとも息子が「同じベッドの上で」母親と「身体を並べて」寝ているか、ともかくも意識を回復した母親が息子に「感謝にあふれた眼差し」<sup>(154)</sup>を向けるか、それとも一晩中意識も無く「唸り声」をたてているか、そして「曙」が差すときも息子が「大きく目を見開いていた」か、それとも「眠り込んでしまいさえした」か、などといった相違点がまず目に入ってこよう。だが、両テキストを通底する、より本質的な共通項に目をとめれば、そうした相違も二義的なものと分る。

(c)と(d), いずれのテキストにおいても、ひとりの〈男〉が、〈男の子〉

の〈母親〉=〈女〉を攻撃して立ち去る。テキスト-(c)では、「男」が、「子供〔男の子〕」の「母」に精神的打撃を与えて「失神」<sup>(154)</sup>させ、「子供」は「男が彼女を殺してしまったのだろうと思」い、「母」は「不幸な牝犬」にたとえられ、「なぐり倒された獣のように深々と寝入っていた。」一方、テキスト-(d)では、「男」が「息子」の母親に「乱暴を働き」、母親は「気を失って」倒れ、獣のように「怯えた唸り声」をあげる。

そこで、いずれにおいても、一つ部屋の中で、別々のベッドにか、同じベッドにかとの違いはあるが、添寝をして、息子ひとりが夜通し母親を介抱する。

そして、いずれにおいても、母と息子が閉じこもった部屋を支配しているのは、「夜」の「静寂」<sup>シラ-ンス</sup>〔沈黙〕、不安と「恐怖」、「病と死」である。

また、舞台背景として、一方では、母親の半ば錯乱した感覚の中で、「ランプの赤い光と暖房器の青い光」からなる「二つの信号」の間を「黒い列車」が通り、「夜間」の「大きな特急列車の音」が聞こえる。他方でも、こちらは息子の確かな眼と耳にだが、「豆ランプの灯芯の焰」と「深夜の電車」の「遠ざか」る音がとらえられている。

さらに、いずれにおいても、幽明の境をさまよう母と息子は周囲の「世界」から孤立し、「世界」はまた彼らにとって無に等しいものとなる。一方においては、息子がかの間でも母親の「死」<sup>(153)</sup>を思い、「彼女はまだこの世」<sup>ス・モンド</sup>〔この世界〕の人であろうか」と問う。そして、息子が母親を看取る日々、「他の人間」たちとは関わりを断って、「この地上でふたりだけ」の「孤独」に閉じこもる。他方においても、母と息子は「すべての人々を向こうに回して孤立し」、「病と死」に侵された「ふたり一緒の孤独」に陥る。そして、そのとき「世界は崩壊してしまっていた。」

この母と息子が「ふたり一緒の孤独」を過す一夜は、いずれにおいても、一種の和解をもたらす。一方においては、「子供の魂の中に大きな平安」が生じ、「彼は幸福だった。〔……〕あの夜は、彼によれば、彼のすべての夜を

あがなってくれたのだった。」<sup>(156)</sup> 他方においても息子は、「ふたり一緒の孤独」に「絶望的」だが「優に優しい〔情愛深い〕イメージ」を抱き、「自分の母に彼を結びつけている絆を感じとった」<sup>(99)</sup>のである。

ここで、テキスト-(d)の材料となった、アルベールの母が暴漢に襲われたという事件の起きた時期について考えてみたい。事件発生は、アルベールの『苦悩』との出会いの前か、それとも後のことか。また、母親の「恋愛事件」との前後関係についてはどうか。

ロットマンは『伝記』で、暴行事件の「正確な日付は不明である」としているが、叙述の順序からすると、母親の「恋愛事件」の後に位置付けているようである。そして、事件当時「アルベールは青年期にあって、他所で暮らしていた」としている。「アラブ人の犯行」とする噂があったという、アルベールの兄リュシアン<sup>ルシアン</sup>の証言もあって、この事件そのものは事実だが、その詳細については、『裏と表』で語られていることをくり返すにとどまっている<sup>(100)</sup>。

この逸話は、定稿『裏と表』の中の小品『肯定と否定との間』で初めて語られる。『裏と表』の祖形をなす『貧民街の声』の中でもまったく触れられていない。『肯定と否定との間』のうちで、この逸話を語る<sup>くだり</sup>件にかかわる異文としても、その一部分の草稿があるのみである<sup>(101)</sup>。後年『裏と表』に付された「序文」の中でのカミュの言が正しいとするなら、『裏と表』を構成する諸エッセーの草稿は1935年から1936年にかけて書かれたから、この2年間の間に、この逸話は初めてテキストとして現われたということだ。したがって、『貧民街の声』に付されている日付の、1934年12月25日<sup>(102)</sup>以降、1936年の終りまでの間に問題の事件が発生した可能性もかなりある。

もし『肯定と否定との間』の、母親が暴行される事件を語る挿話の状況設定が、ロットマンの信ずるように、自伝的事実に即していて、「アルベールは青年期にあって、他所で暮らしていた」とすると、『苦悩』を読む以前に

この事件が起きた可能性はあるだろうか。アルベールが『苦悩』と出会うのは、1931年10月から1932年6月の間であると私は推定しているが、『肯定と否定との間』ではこの事件は「夏」の間の出来事となっている。『伝記』によると、1931年の夏は、兄リュシアンが兵役からもどってきていて、秋に結婚して出るまでは、リヨン通りの家に母親と一緒にいたという。弟のアルベールのほうも、おそらく同じ頃まで、家にいたようだ<sup>103)</sup>。とすると、1930年の夏で、アルベールの発病(1930年12月)以前ということになる。少なくともこの年の夏は、兵役でリュシアンは不在であったはずだ。そして、私の推定によると、母の恋愛についてアルベールが知るのは、1929年11月から1930年早々にかけてである。『幸福な死』のための草稿の一つが、「生の状態」での「自伝的」事実関係を伝えるものだとすれば、それによると、母親の恋愛事件後、アルベールは叔父アコーの家で「半ば暮らしていた」ということなので<sup>104)</sup>、「他所で暮らしていた」と言えないこともない。そして、同じ草稿によると、アルベールは当時「16歳」<sup>105)</sup>で、「青年期ジュネス・オム〔青少年〕」にある。

だが、そうすると、これだけ重くかつ深い内容のある逸話が、事件発生から『裏と表』の草稿執筆時期まで、五、六年もの間、テキストの上になんの根拠も残さなかったのはなぜかという疑問が生ずる。

それに、「ふたり一緒に熱っぽい空気を吸っていた」とか、「自分が陥っていると彼には感じられる、病と死のほかには何も」といった表現を見ると、あたかも「彼」自身が「病と死」に脅かされ、侵されているかのようでもある。これは、「彼」の「ふたり一緒に」という、母親との一体化への願望に根差す同一化によるとも言えるが、それと同時に、「彼」自身の身心が、「病気」と「死」の観念を受け入れやすい状態にあったと考えるのが自然だ。ということは、「彼」のモデルがアルベールなら、母親の暴行事件は、アルベールに「最初の結核の徴候が現われたのは、1930年12月、もしくは1931年1月前半のことであった」<sup>106)</sup>のだから、それ以降に起きたと考えたほうが

よいということだ。とすると、先に述べたように1931年の夏ではありえないから、1932年の夏以降に起きたということで、『苦悩』との出会いの推定時期の下限が1932年6月であるから微妙だが、『苦悩』を読む前に事件が起きた可能性は少ないと言えそうだ。ただ、いずれにしても、それは母親の恋愛事件後のことではある。

さて、テキスト-(c)とテキスト-(d)にもどる。先に指摘したように、目を引く類似点の一つは、ひとりの「男」が精神的あるいは身体的な打撃を「母親」に与え、「男」が消えた後で「息子」が登場し、「母親」を看取って添寝するという筋書である。この「男」というのは、「息子」のことなのかもしれない。つまり、「男」は「息子」の分身として、「息子」の潜在的願望を充足させる機能を担っているということだ。そのような想定は、ただちに、「息子」の抱く願望を近親相姦的なものとする解釈を招きやすい。『苦悩』の「男」は夜々、「母親」と情を交していたのであり、彼女は「男」の立ち去った後の暗闇の中に「横たわって」いたのだから。また、『肯定と否定との間』の「男」は、「母親」の「背後」から襲いかかり、「乱暴を働<sup>フリユタリゼ</sup>いた」というのだが、この場合、「乱暴」に性的な含意を読みとることはまったくの見当違いであるとは言えまいから。そして、いずれの場合も、「息子」は「男」に替って、母の傍らで添寝するからである。テキスト-(c)では、ジョルジュは母親とは別のベッドに寝ているが、1年前の「10歳」<sup>(31)</sup>のときには、孤児のオルガに自分のベッドが与えられたので、「母親と一緒に寝て、首筋に女の息を感じていた」<sup>(43)</sup>し、その後も、少なくとも「雷雨」のときには、母親と「一緒に寝」<sup>(63)</sup>る習慣があったのだ。

確かに二つのテキストには、そのような近親相姦的な雰囲気<sup>フレイム</sup>が濃厚に漂ってはいる。だが、より根底的な類似に目を向けてみよう。一方は、「男」が「母親」に精神的な打撃を与えて、「死にたい」<sup>(153)</sup>気持ちにさせ、「母親」は冬近い冷たい空気の中に「横たわって」いた。また、「息子」は「男が彼女を

殺したのだと思った。」他方は、「男」が「母親」に身体的打撃を与えて、「重度の脳震盪を起」こさせ、「母親」は一夜「病と死」の危険に瀕した。

『苦悩』においては、「男」が「母親」を棄てるということが、「息子」が心ひそかに母の身の上に願っていた「罰」<sup>(187)</sup>なのである。母が十分な罰を受けた夜であるからこそ、「あの夜は、彼によれば、彼のすべての夜をあがなってくれた」のであり、「大きな平安」が彼の「魂」を「満たしていった」のである。そして、「ドイツ人たちはもう家の前を通らなかつた」し、母と息子は「幾日も幾日も、まるきり他の人間の顔を見ないでじっとしていた。」「男」もその中のひとりである「ドイツ人たちは」「母親」にとって憎い人間たちであり、「息子」にとっても母を奪い、自分たちを苦しめた、「殺した」<sup>(186)</sup>いほど憎い人たちであるはずだ。「他」<sup>エトランジェール</sup>の〔外国の、関わりのない〕人(たち)はそうした「ドイツ人たち」の延長上にある。母と息子が「この地上でふたりきり」だという感覚には、その背景に、周囲の世界を拒絶する敵意が感じとれる。そしてこの敵意は、母親その人に向けられていた敵意の投影であるだろう。だが、母親が息子を裏切った罪も、それゆえの息子の母に向ける敵意も決して消えはしない。「彼女は、彼女が彼に流させたすべての涙に相当するほどには決して泣きはしないだろう」<sup>(180-181)</sup>から。ただ、母親が「罰」せられて息子のもとにもどってきたので、「いやしようのない傷」に根差す息子の敵意も、しばし外界に転じられたのである。

『肯定と否定との間』において、「先ほどの事件の恐怖が暑苦しい部屋の中にまだ残っていた」というとき、この「恐怖」は「怯え」つづける「母親」のものであると同時に、「息子」のそれでもある。「足音が伝わってき、扉がきしむ音がした」という険悪な雰囲気を感じとっているのは息子なのだから。そして、襲った「男」への「恐怖」と敵意は拡がって、「すべての人々」に向かう。息子は母とともに「すべての人々を向うに回して〔に対立して〕孤立していた〔ふたりきりだった〕」のだ。この挑戦的とも言える口吻には、息子の「他人ども」や「世界」に対する敵意が明らかに読みとれよう。やは

り暴漢の、母親への「乱暴」は、息子の加害的な願望の充足なのであって、それを以て息子は母親を「罰」したのだが、なお「いやしようのない」敵意は、外界に矛先を転じたということなのであり、それゆえにこそその「疎外〔異郷にある〕感」なのである。

そして、母親に「罰」が下って、心中ひそかにそれを願っていた息子は、いわば「なぐり倒された獣」のような「怯えた唸り声」をたてる母親に、あらためて「自分の母に彼を結びつけている絆を感じとった」のである。そのような罪と業に彩られた「絆」で結ばれた「ふたり一緒の孤独」であるからこそ、それは「絶望的」であり、かつ「優に優しい〔情愛深い〕イメージ」と言われるのである。

以上のような、テキスト-(c)とテキスト-(d)の、筋立てなどの表面的なものから深層の心的構図に至るまでの類似をどのように考えたらいいか。まず、先に推定したように、母親の恋愛事件、『苦悩』との出会い、母親の暴行事件、という順序で事が推移したとすると、母親の恋愛事件に際して味わった苦悩ゆえにアルベールはジョルジュの苦悩に共感し、ジョルジュに同一化して、後者における情動開放の回路がアルベールの心中に心理的な鑄型として残った。その後起きた母親の暴行事件は、この心的原型に沿って意味付けられたのであって考えられる。

しかしまたそれ以上に、『苦悩』との出会いに先んじて、アルベールはすでに、「呪われた女」<sup>(176)</sup>としての母親の頭上に「罰」が下ることを心中深く念じていた「呪われた」息子であったのであり、罰せられた「不幸な牝犬」としての母親と「殉教者」としての自分の、愛憎と罪業に彩られた「ふたり一緒の孤独」にしか、果ては共同の「病と死」にしか、母と息子が「再び出会う」道はないのだと、少なくとも無意識には感じていたのであると、そして、それゆえにアルベールは、母親の暴行事件に先立って、「なぐり倒された獣」として手もとに帰ってきた母親を介抱するジョルジュの心の「大きな平安」と、母と息子の、「この地上でふたりだけ」の「孤独」に深い共

感を覚えつつ『苦悩』を読んだのだと考えられる。

後者の推測を裏付けるものとも言えるであろうテキストが残っている。第3章II-Aのテキスト-5の項でその半ばを紹介した、『『肯定と否定との間』のための草稿断片』(以下、「草稿断片」と略記)である。その中に、「息子である彼がかなり重い病気に患ったときの、彼の母親の奇妙な態度」が描かれている。この「母親」が「女中部屋」で働いていること、「重い病気」の「最初の徴候」が「大量の吐血」であったこと、「息子」の「面倒をみたのはひとりの叔父だった」<sup>107)</sup>ことからして、「最初の結核の徴候」が現われて、叔父アコーの家で養生していたアルペールを見舞った母親の反応が素材として使われていると推定される<sup>108)</sup>。

「母親」は「息子」が咯血したとき、「ほとんど恐れを示さなかった」し、その後も「彼女は彼の病の重さを知らないわけではなかった。だが、彼女はそんなふうには彼女のいつもの驚くべき無関心で通しているのだった。」<sup>109)</sup>

この「草稿断片」の「母親」が示す「無関心」には、『苦悩』における、母親の恋人である「男」への「嫉妬」<sup>(123)</sup>と、「私生児」<sup>(135)</sup>を母が産むことを恐れての懊悩ゆえに息子ジョルジュが「衰弱してゆくのを、まだ悪習に染まっているのだと考えて、不安もなく見ていた」<sup>(137)</sup>母親テレーズの「無関心」<sup>(90・123)</sup>、「想像力が働かなかった」<sup>(46)</sup>からというよりは、むしろより根本的な「無感覚」<sup>(103)</sup>に由来する「無関心」を想起させるものがある。

ただ、異なるのは、『苦悩』ではジョルジュが母親の「無関心に大層気分を損ね」<sup>(90)</sup>、やがて母親との間の関係は「幾分敵意をはらむ無関心に移っていった」<sup>(102)</sup>となっているのだが、「草稿断片」では、息子は「そのこと〔母親の無関心〕で彼女を責めようとは思わなかった〔……〕暗黙の了解が彼らを結びつけていたのだ。そして彼自身、彼の母親が病気になったとき、さしたる危惧を覚えなかった」<sup>(110)</sup>というように、その「無関心」には「敵意」が含まれず、かつ「無関心」は相互的なものであること、そして逆に、「暗黙の了解」が強調されていることである。

「草稿断片」の「敵意」なき「無関心」と「暗黙の了解」は、「彼」アルベールの実感であったのか、それとも願望が語られているにすぎないのか。また、実感としても、そこにすでに否認や理想化という心的な防衛機制が働いていなかったかどうか。そうした問題はひとまず措くとしよう。いま問題なのは、その先である。「息子」は「母親」への自分の「無関心」を次のように説明する。

「〔……〕 彼には、自分が死ぬことはありえないという気がいつもしていたのだった。〔……〕

彼はこれまで、母親が死にはしないかと恐れたことは一度もなかった。そんなふうには彼は彼自身の無関心を説明していた。そして、母親の眼差しのうちにも同じ確信を彼は読みとっていたのだと言わねばならぬ。彼女は共同の永生という考えを無意識裡に抱いていたのだ。」

他方では、「死の恐怖が甚だしく彼にとりついていた」し、「他人たちの死については鋭い、苦痛に充ちた感情をもっていた」<sup>111)</sup>にもかかわらずである。

この母と息子に限定された「共同の永生」という観念は、『苦悩』の「狂った母」が息子に囁く、「死ぬとしても、少なくとも、私たち一緒にだものね」<sup>64)</sup>という言葉、そして、やがて精神錯乱に追い込まれる息子の「ママが死んだりしたら、ほくも死んじゃうからね」という言葉が織り成す、「ふたりの死」(ガサン)とは一見するところ次元の異なるものに見える。だが、「苦しみの丘」の頂にある「ふたりの死」と、母と息子の「共同の永生」とは、同じ事態の表と裏なのではないだろうか。

第1章で私は、伝記的資料の検証によって、アルベールのうちに「相対的依存」の時期における固着を推定した。この時期、子供は母親との「分離」と「合体」の間を行きつもとどりつする(ウニコット)。合体とは、母と子の分離を否定し、母と子の一体感を充足させることである(土居)。幼児にとって、死への不安とは要するに分離への不安なのだから、逆に母と子の合体と

は、「共同の永生」のことであるということになろう。確かに客観的に見れば、それは「融合空想」(ジェイコブソン)なのだが、幼児にしてみれば、それが現実なのである。そしてその現実性が母親の愛撫や抱擁のうちに、その甘美な身体感覚のうちに確認される以上、この「永生」はあの世のものではなくして、この世のものであるだろう。

この「永生」は「哲学者たちの言うあの不<sup>イモルグリテ</sup>死」にはあたらず、「自然的な死」と同じ次元で、「死ぬことはありえない」<sup>112)</sup>ということだとされている。つまり、ここで言われているのは、「自然的な」、身体的な「永生」のことなのだ。

そして、「草稿断片」のテキストにおいて、「共同の永生」の観念は、母親の、さらには母と子の、共同の「無関心」と相関的に現われている。幼児にとって「共同の永生」が、先に述べたように、母と子の合体のことであるとすれば、「無関心」は、合体と相関的な、母と子の分離にあたろう。母親の「無関心」が喚び起こす子供の側の分離不安と敵意が否認されているところでは、幼児期に固着している者にとって死とは所詮分離への不安以外のものではないのだから、一方では、「自分が死ぬことはありえないという気」が防衛機制として強化され、他方では合体の対象である「母親が死にはしないかという恐れ」も否認されて、合体の可能性が、つまり「共同の永生」が「確信」されるというわけである。「確信」を抱いているのは息子であり、「母親の眼差しのうちにも同じ確信」を「読みと」るのも、母親の「無意識」のうちに「共同の永生という考え」を見てとるのも、「彼」でしかない。母親のほうは、「そんなことは考えもしなかったのだ。」<sup>113)</sup>とすれば、「確信」が共同のものではなく、一方的な、息子の幻想にすぎないということも大いにありうるのだ。

「草稿断片」の、ここで問題にしている件<sup>くだり</sup>が扱っているのは、アルペールの結核発病時と、その後のまだ生命が危険な療養期の事柄である。アルペールは母親の恋愛事件に続くこの危機において、母親の「無関心」ゆえの、ま

た「医者は匙を投げていることをほのめかした」<sup>114)</sup>ことからくる、分離と死の不安の極みにあったわけで、幻想的な「確信」は必至で必須のことであったにちがいない。そして、母子合体の幻想が昂まり、行きついたところが「共同の永生」であったということだ。

もし、この世での「共同の永生」という「確信」が崩れたらどうなるか。「暗黙の了解」が母と子を「結びつけてい」という「確信」が幻想にすぎないことが明らかとなったとしたら。そのときは、生きてあることで「共同の」生が成り立たないとするなら、合体は不可能で、母親の絶対的な「無関心」の前に永遠に分離のうちにとり残されるとしたら、そのときは、「共同の」死にしか、「ふたりの死」にしか、道はないであろう。少なくとも死においては、母親の「無関心」も、それゆえの息子の敵意と苦悩もないのだ。「ふたりの死」において、「少なくとも、私たち一緒にだものね」という「共同」性が確かめられはするのだ。以上のような意味においてという限定を付けた上ではあるが、この「共同の永生」にふれて、「この神話的な永生は、死と見紛うほどよく似ている」<sup>115)</sup>と言うパンゴーの判断は正しいとしなければならぬ。

分離を望めば分離を妨げ、合体を望めば合体を拒む、そのような母親の拘束下におかれた男の子が、やがてたどる「ふたりの死」(心中)という道行を回避する手立てはないのだろうか。考えられる一つの方途は、上辺はどうでも結局のところ子供に対して「無関心」な母親のもとを去って、それに代る者を別に探すことであるだろう。たとえばジョルジュは、「身を守るすべもなく、自分の母親に見棄てられていると感じ」<sup>(130)</sup>たとき、さらに「自分の母が子供を産むかもしれないと思」<sup>(135)</sup>ったとき、「彼はもう母を愛していなかった。彼女が死んで、自分はイギリスに向けて、あの叔母のもとへと出立する姿を思い浮かべ」<sup>(136)</sup>たのだった。そして、母親に子供を産むかもしれないと聞かされると、「もしまた他の子を産むんなら、僕はもうここにいたくない。僕は行っちゃうから」<sup>(179)</sup>と言っている。

ただ、「彼女が死んでリ・マジネ・モルト [いるのを想像した]」という言葉には、ジョルジュの心中にある母親への死の願望がうかがえる。彼においても、母親拘束がすでにあまりに強いので、直接的にしる間接的にしる、母親を「殺」<sup>(153)</sup>すのでなければ、「出立」は、分離独立は不可能と看取されているということなのであろう。実際、彼が母親のもとを離れることができたのは、現実的に「彼女が死ん」だときでしかなく、しかも殺意をはらむ「敵意」を向けていたがゆえの、母殺しの責めを負う無意識的な罪責感から、その後も「その精神状態はかなり不安定である」<sup>(189)</sup>というように、「出立」もまた永久に不可能であるのかもしれない。

アルベールの場合には、結核の発病がいわば不幸中の幸いとなって、母親のもとからの「出立」が可能となったとも考えられる。療養のため身を寄せた叔父アコーの家で、「意志の強い叔母に見守られ〔庇護され〕つつ、彼は願ってもない条件のもとで療養生活を送ることができた」<sup>(116)</sup>とすると、この「叔母」、つまり母カトリーヌの妹アントワネットが、一時的にも母親代理の役を務めたのではないかと思われるのだ。

だが、母親拘束下の男の子が、そこから脱出するには、もう一つの方途がある。そしてまた、結局のところ、それが唯一の、「出立」への道なのである。

### (3) 息子と父

ジョルジュは、「1917年12月」<sup>(157)</sup>の日付と翌年「2月」<sup>(184)</sup>の日付の間で、「11歳」<sup>(179)</sup>であると言われている。したがって、「1915年6月24日」<sup>(189)</sup>に父親が戦死したとき、ジョルジュは8歳くらいであったわけだ。そのとき、「父の死はほとんど彼の心を動かさなかった。」<sup>(66)</sup>とはいっても、「1914年8月、大尉〔ジョルジュの父〕が召集されたとき」<sup>(7)</sup>には、7歳くらいだったのだから、ある程度は父親についての記憶があるはずだ。実際ジョルジュは、冬の夜、「広場」で「北風」にまかれているのが好きなのだが、それは、その

中で「魔王の歌声を聞いていた」からなのである。そして、「バリトンのすばらしい美声」の持主であった父が、「彼のためにこの不思議な伝説の歌を、彼の幼いときに、唄ってくれたので〔……〕彼の心の中にその歌の神秘的な魔力が保たれていた」(17-18)からなのであった。そのとき夜の「闇はいたるところ、彼を抱いてゆする冷たい手に充ちあふれていた」が、「彼は恐い思いをさせられるのにとてつもなく楽しみを見出していた」(17)のだ。

この「歌」はシューベルトの歌曲『魔王』で、歌詩はゲーテのバラッドだが、そこでは、子供は父親の腕の中で、熱病に冒されて死んでしまうのである。父親は、家で母親が待っていると言う。村では魔王の娘たちが歌を唄っているのを子供は聞く。それは熱に浮かされた子供の空耳なのだ、と父親が言う。

そのような内容をもつ歌曲が『苦悩』の文脈に置かれたとき、その「神秘的な魔力〔秘密の魔法〕」は別様の響をもつ。魔王の娘たちは、家で待っているという母親の代理者であり、熱病で子供を殺すのは、母親その人ではないだろうか。「広場」はジョルジュの家の前にあって、そこから「彼の家の緑の明かり」が見え、そこで待っている母親の姿が思い浮かんでいるはずである。現実には「彼は父の腕の中にはいなかった」(17)、だから熱病で死ぬおそれはないのだが、その心の深層においては、「父の腕の中」も結局は「魔王」である母親の手から、「彼を抱いてゆする冷たい手」から救いえない、そんな予感にジョルジュはとらわれて「恐い思い」をし、かつまた、そこに「とてつもない楽しみ〔恐るべき快楽〕」を見出していたのかもしれない。あるいはまた、「家の緑の明かり」を目の前にしながら、「広場」で「父」の思い出にふける息子は、〈母〉の世界を拒否し、「彼の（ごく）幼いとき」に「彼の心の中に」刻み込まれた、父の「美声」の思い出と、それが伝える「神秘的な魔力」を頼りとして、「父の腕の中に」、〈父〉の世界にたどりつこうとしながら、逡巡しているのかもしれない。

この「心の中」からの〈父〉への呼びかけは、母親拘束が強まるにつれ

て、ますますはっきりとした形をとってゆくように思われる。小学校で「授業の時に、アレクサンダー〔大王〕やチュレンヌ〔17世紀フランスの元帥〕が偉大な〈司令官〉<sup>キャピテーン</sup>であったと聞かされると、ジョルジュは奇妙な誇りの感情が胸に湧いてくるのを感じるのだった。」自分の父親が「大尉」<sup>キャピテーン</sup>(49)であったからである。

オルガを「選んだ」(39)のはジョルジュである。「少女は彼の全世界になった。しかし、彼女は、小学校の教師に導かれた彼の心の中で、彼の父親の思い出の見張り番を務めているのだった。」オルガが戦争「避難民」(40)の娘であることを前提にして言われているのだが、しかしまた、オルガが、ジョルジュのたどる〈父〉への道を「見張る者であることをも示していよう。「ひとりの女」(32)としてオルガを「選」びとることで、母親を「排除」(51)し、母親の「膝の間」(13)を抜け出て、母親の「愛の玩具」(14)、母親の「犠牲〔餌食〕」(14)でしかないものから、「一人前の男」(30)になることができるとすれば、それはすなわち、母親拘束を脱することであるからだ。

さらに、オルガが追い出された日の夜、雷雨ではあったが、それまでの習慣に逆らって、母親と一緒に寝るくらいなら「たったひとりで恐怖のあまり死んだほうがましだと思っていた」(63)し、「いまや《彼〔神〕》について考えるときだと彼は思った。彼は雷火から身を守るためにどうしていいかわからなかった。彼は不器用に彼の父や、神や、聖人たちについて考えた。彼は自分の死を身近に思ったが、母の庇護を求めたくなかった。」(64)「父」と「神」が並置され、それが「母」と対立するものとして置かれている。そして、その間に「死」がある。つまり、息子は「母の庇護」=母親拘束を脱して、いまや「不器用」に、手探りで「父」=「神」を「求め」ようとするのだが、それは「自分の死」を睹さねばならぬほどに困難な道程であるということだ。

他方では、「ジョルジュ・ドロヴルはこの(神の)光を生まれたときから待っていたのだ」とも言われている。それは彼の天与の資質としての宗教心の開花を意味しているかのようだが、ジョルジュにとって神への道は「未知

の大地に入ること」であり、「神はこの子供を母親から取り上げようとしていたのだ」<sup>(91)</sup>とすると、そして、宗教への傾斜が、母親の「無関心」と、「母親の顔以外の他の人の顔を見るためなら、彼が行かないところなどあったろうか」<sup>(70)</sup>という母親離れの欲求と並行して現われているところを見ると、「母親」から「子供」を「取り上げようとして」いる「神」とは、「未知の」世界の象徴的存在であり、すぐれて〈父〉の代理者なのだと知れよう。

オルガが消え去ると、ジョルジュは「数日ふくれっつらをした後、母の膝の上にもどってきた」のだが、彼はそのときおそらくオルガへの、そしてオルガが「見張り番」を務めている、その背後にあるものへの「自分の感情を隠していた」のであって、その証拠に、「今や大尉のことが話題になるだけで、父に再会したいという大きな欲求が彼の心をとらえてしまうのだった。」<sup>(66)</sup>やはりオルガは〈父〉への道の「見張り番」、案内人であったのだ。次いで、オットーが登場する。

オットーを含む三人組のドイツ人捕虜に会った後で、ジョルジュは、「彼らはとても優しい感じだ」<sup>(77)</sup>と言うが、他方では、「孤独にうんざりしていて、若者たちがまたやってくるのを見たいとは思ったが、彼らに嫌悪を感じていた。」というのも、「この三年来ドイツに関するあらゆる卑劣なことどもを絶え間なくくり返し聞かされてきた」<sup>(78)</sup>からである。ここでは、ジョルジュがオットーを含むドイツ人一般に対して、漠然とした両価的な感情を抱いていることが分る。そして、その「嫌悪」は、教え込まれた固定観念に根差すもので、「若者たち」自身の性質に原因するものでないことも。これはオットーが独りで登場してきて、テレーズが「もう自分と恋人のためにしか生きていなかった」<sup>(102)</sup>というようになって、変らない。ジョルジュはオットーを「優しい人とは思っていたが」、「このドイツ人を好かなかった〔愛さなかった〕。」というのも、「学校でも教理教育でもドイツについての悪口をあんまり聞かされすぎていた」<sup>(104)</sup>からなのだ。また、誕生祝いとしてのオットーの接吻を、「ドイツ野郎に接吻したくないから」<sup>(106)</sup>という理由で拒む。

そして、「これからはずっと、父親がドイツ人である私生児を弟として自分のそばにもたなければならないのだ」と考えると、「恥辱にまみれ」<sup>(180)</sup>る。

オットーへの「嫌悪」が殺意にまで昂まるのは、オットーを含む「ドイツ人たち」が唄いながら行軍し、村を去っていったときである。「唄いながら——彼がこの世で愛している——大切なものを奪ったこの男を殺したかった。」<sup>(186)</sup>しかし、このときですら、「唄い」、行軍していくのは「ドイツ人たち」であり、「彼」オットーはその中のひとりにすぎない。そして、大詰めで、「炎の海」を前にしての幻覚に現われるのは、攻撃的な「ドイツ人たち」<sup>(188)</sup>である。

結局、オットーはジョルジュにとって、「愛」よりは「嫌悪」と「殺」意にまで昂まる敵意の対象、母を「奪」うライバルとして「嫉妬」<sup>(123)</sup>の対象でありつづけたし、また、終始「ドイツ人たち」のひとりにとどまりつづけ、ひとりの個人としての「この男」としては、ついに現われえなかったと言える。

他方、オットーのほうは、ジョルジュのことをどのように考えていたか。ジョルジュの「こうした抵抗は彼を苛立たせはしたが、また彼を讃嘆の気持で一杯にした。〔……〕彼は、農園にいるとき、テレーズのことよりはるかによく子供のことを考えた。〔……〕しばしば〔……〕彼は子供の一つの微笑を得るためなら、母親の与えてくれる愛のすべてを棄てても惜しくはなかったろう。」<sup>(105)</sup>また、テレーズが別離の予感に慄き始めた頃には、オットーは「時として女〔テレーズ〕を軽蔑しはした」が、「彼のあらゆる甘言に抵抗するこの子」は、「最大の感嘆にふさわしいと彼には思われた。」<sup>(140)</sup>つまりオットーは、「ジョルジュ・ドロンプルは（ひとかどの）男だと考えていた」<sup>(106)</sup>のである。

「女」・「母親」と「ひとかどの男」が対立して置かれ、前者への「軽蔑」およびその「与えてくれる愛」を「棄て」ることと、後者への「讃嘆」が並行して主張されている。言い換えれば、オットーはジョルジュを「ひとかど

の男」として遇することで、母親拘束を脱する〈父〉への道を示そうとしていたということだ。

「ドイツ野郎たち」のうちの誰かの落とした「金属製のボタン」を、テレーズは「暖炉の上に」置いたが、それは「彼女が気まぐれに追い出した小娘〔オルガ〕の鉄の眼差しのように輝いていた。」<sup>(65)</sup> オルガの「<sup>ウイユ・ド・クリスタル</sup>ガラス製の眼」<sup>(45)</sup>が「<sup>ル・ガール・ド・フェール</sup>鉄（製）の眼差し」となって、オットーのとも言える「金属製のボタン」の比喩に使われている。そして、オットーは、「父の思い出の見張り番」であったオルガが消えた後、彼女に入れ替わるようにして、この「金属製のボタン」を前触れに登場する。つまりジョルジュの父の戦った「敵」<sup>(49)</sup>であったオットーは、オルガとは別の仕方で、「父の思い出の見張り番」の役を果たす者であるのだ。

ジョルジュの父親は「バリトンのすばらしい美声」の持主で、シューベルトの歌曲を「思い出」として息子の「心の中に」残したが、オットーも「美しい重々しい声」<sup>(85)</sup>、「響の良い」<sup>(94)</sup>声の持主で、話をしているときですら、「まるで何か彼の国〔ドイツ〕の歌をゆっくり唄っているようだった。」<sup>(75)</sup> この共通点もまた、オットーが父親代理者であることのしるしであるだろう。

だが、結局オットーはテレーズを棄て、「私生児」をその体内に残して去ってゆく。彼は父親代理の役をまっとうすることができなかった。「25歳」<sup>(75)</sup>で、「若かったし、恋愛書の外で過ぎてゆく人生についてはほとんど知らなかった」<sup>(140)</sup>男には、ジョルジュの父親の役割は務まらなかったのだ。

もしオットーがテレーズの「夫」<sup>(178)</sup>になっていたら。その場合も、ジョルジュが母親を「奪」われ、自分自身が、「父親がドイツ人である」という「恥辱にまみれ」ることに変わりはない。また、「ドイツ人」であるオットーを「父親」とは決して認めはしないだろう。ただ、それでも息子は、「行っちゃおう」<sup>(179)</sup>ことが、つまり母親拘束を脱して、彼の心の中で母親が「死んで、イギリスに向けて、彼を愛してくれ、神の友であるあの叔母さんのところへと出立する」<sup>(136)</sup>ことができただろう。そしてそこで、母親代理者として

「叔母」を、父親代理者として「神」を見出すことができたかもしれない。

母親が「私生児」を産む可能性に初めて思い至ったとき、ジョルジュは「神」と「父」の名において、「情け容赦のない残酷な裁き手」となる。「母は神に背き、夫を忘れていたのだ。そんなことのために父は死」んだのだと。また、「私生児」を産みたいという母親の願いを断固として拒むのも、やはり「父」の名においてだ。「赤ちゃんを産むことなんてできないよ、だってパパは死んでるんだから」(179)と。

だが、「神に背き」、「父」を裏切った母親の背徳とともに、「父親がドイツ人である私生児の弟」(180)をもつことによる「恥辱」にまざるものが、ジョルジュの怒りと絶望の背景にひそんでいるように思われる。母親が「夫を忘れ」たように、自分もまた忘れ去られるのではないか。これまでも自分が母親にとって「決して何ものでもなかった」(180)が、「弟」ができれば、以前にもまして自分は母親にとって「何もの」でもなく、「人生にとって無益な」(136)ものになってしまうという、分離不安の昂まりがあるのではないだろうか。

「父」と、勝れて〈父〉の象徴である「神」は、ひとたびはジョルジュを母親の「膝の間」から引き離し、〈父〉なる「未知の大地」へと誘うことに成功するかと見えた。しかし、母親が結局「私生児」を産む考えだと知ってからは、母を、「その姿を目にするのにも耐えられないくらい彼女を憎んでいた」が、同時に「彼はもう善き神のことは思わなかった……今や春への期待が、世界が、そして彼自身が彼にとってなんだろう？彼の小さな心は永久に死んだようだった。」(184)「善き神」、すなわちジョルジュに残された最後の〈父〉も、愛憎さかまく母親拘束下にとりこめられた息子を救い出すことはできなかったということだ。息子はもはや「破局のくるのを待」(184)つ以外にない。そして「破局」とは、すでに見たとおり、母の死と「世界」の解体、そして「彼自身」の精神の崩壊、つまり「ふたりの死」であるほかなかった。

さてアルベールの場合には、父親の死を「たぶん3歳あるいは4歳のときに」知ったのだが、「父を知らなかったので、その知らせは私にとって幾分抽象的だった。」<sup>117)</sup> 実際、父親が出征したときアルベールは生後9カ月くらいであった。

とはいえ、「父親とは、他の人たちのものだった」<sup>118)</sup>という後年のカミュの主張にもかかわらず、アルベールの場合においても、少なくとも無意識裡に、〈父〉を求める傾向は徐々に強まっていったはずである。そして彼の場合、不幸中の幸いに、「閉ざされた世界」<sup>119)</sup>に昼間いたのは恐い祖母だけで、外の「魔法にかかっているように想像される世界」のほうがはるかに彼を魅了してただけでなく、「10歳」<sup>120)</sup>という、ジョルジュとほぼ同じ年頃で、小学校教師のジェルマンを勝れた父親代理者として得ることができたのである。「ジェルマン自身も出征し、無事に復員したのであった。それで彼は、少なくとも教室では、彼ら〔父親を大戦で亡くした子供たち〕の父親代りを務めなければならぬと考えていたのだ。この小学校教師はまた、子供と祖母の間を取りもったり、母を愛するように彼を励ましてくれた」<sup>121)</sup>のだった。そして、すでに述べたアコー叔父をはじめとして、アルベールは次々と並外れた父親代理者たちにめぐり会っていくのである。それは、アルベールは幸運であったのだとも言えるが、また、彼の側の分離独立の必要性と欲求の高さを、そしてそれゆえの、〈父〉の世界への確かな道案内人を求める心の強さを意味してもいよう。彼の場合にも、ジョルジュの場合とは現われかたは違うが、「ふたりの死」という「破局」に至るほかないような、蟻地獄に似た母親拘束の強力な磁場が彼をとりまいていたのであり、次々と父親代理者を獲得していくことは、無意識裡に潜在する「ふたりの死」への傾斜から、己れ自身を救いつづけるための、必死で必須の努力の過程でもあったと言うことができよう。

ジョルジュには「心の中に」刻まれた「父の思い出」としてただ一つ、歌曲『魔王』を子守歌として「彼の父の腕の中」で聞いていたことがあるが、

アルベールの場合にも、それに相当するような「父の思い出」があって、それは「まだ子供の頃のアルベール・カミュに、彼が父親について耳にした唯一の逸話——おそらくそれが唯一のものであったからということもあって——その後の彼の生涯で大きな意味をもつ逸話」<sup>122)</sup>である。それによると、アルベールの父親は「子供殺し」の死刑囚の「斬首刑」を見物に行き、家に帰ってくると「突然吐き始めた。」<sup>123)</sup>そしてこの恐るべき「逸話を話して聞かせたのは、たぶん旧姓カルドナの祖母カトリーヌ・サンテスであったのだろう。」<sup>124)</sup>

『魔王』の「伝説」が子供の死と父親の敗北を以て終る、すなわち「魔王」である〈悪い母〉の勝利で終るように、アルベールの父の「逸話」にも、「子供」の死と、「突然吐き始めた」という父の敗北があり、〈悪い母〉の象徴としての「斬首」台があり、そして、この父の敗北と子供の死を予告する悪夢のような「逸話」を幼い子供に語り聞かせた「祖母」すなわち〈悪い母〉がいる。

『苦悩』の登場人物のひとりに、端役だが、「骨折した片足で跛行」する「白痴」<sup>(181)</sup>がいる。アルベールはこの人物のうちに、失敗した最初の父親代理者であるエチエンヌ叔父の姿を認めたかもしれない。

ジョルジュのほうは、ついに良き父親代理者にめぐり会えなかった。〈父〉なる「神」の代理人であるムラン神父も、その葬式するとき「ムラン神父の死はジョルジュの心を全然動かさなかった。彼はこの男を愛していなかった。そのことに今彼は気付いたのだ」<sup>(161)</sup>とされているように、〈父〉への道の案内人にはなれなかった。

これはついでだが、この葬式のときのジョルジュの無感動は、『裏と表』の中の小品『皮肉』における、「祖母」の葬式のときに「孫」が示した無感動を想起させることを指摘しておこう<sup>125)</sup>。

〈父〉への道は、アルベールの場合、文字への、学問への、そして究極的

には、文学表現への道であった。それは、I「はじめに」で引いた「アンドレ・ジッドとの出会い」で見られたように、「(ひとりの)母親」とそれにまつわる思い出を排除、抑圧するのではなく、それらを象徴的次元にもたらし、「言い表わ」すことによって、「心の奥のあいまいもことした絆の結びよりを解」き、「名付けぬままに、窮屈に感じていた桎梏から」自分を「解放」することをめざす道なのである。

ジョルジュの場合、「桎梏」としての母親拘束とそれにまつわる「心の奥のあいまいもことした絆の結びより」からの「解放」は、〈父〉なる神への道をたどることで達成されるかに見えたが、結局「善き神」も〈悪い母〉を前にして無力に敗退する。ジョルジュは身体的に母が「死んだ」のでなければ、決して母のもとから「出立」することはできず、〈父〉なる神ではなく、「狂った母」を崇める「殉教者」として終る。彼は身体的に母を「死」に至らしめることはできても、精神的には母を殺しきれず、「行っちゃう」ことによって、いくら母から逃走を企てたとしても、彼の心の中の対象として蘇る〈悪い母〉は彼をとらえて離さず、やがて「ふたりの死」へと彼を引きずり込んでしまうのである。

アルベールにおいては、一方において、彼を「(ひとかどの)男」として認めると同時に、「男」の範としてアルベールに仰がれるに足る父親代理者たちに恵まれ、他方において、「母親」が「私の母」ではなく、不特定な「ひとりの母親」であるように、「母」を言葉の次元にもたらすことで、生身の特定の「母親」を精神的に殺そうと志したのであり、そのようにして内的対象としての〈悪い母〉からの「解放」を勝ち得たのであった。テキスト表現における、生身の「母親」から象徴としての〈母〉への、苦渋に充ちた過程は、すでに引いた「草稿断片」のうちに如実に認めることができる。

「彼〔息子〕は、人の言うように、知性があった。そして彼を彼女〔母親〕から隔てているものこそ、まさに彼らふたりを別つものだった。一冊の本が見出されるごとに、感動の一つ一つがますます洗練されてゆくごとに、一つ

の発見、一つの花が徐々に彼らの間を遠ざけていったのだ。

生きているもの、つまり彼自身の心は他の所に、彼の母が働いているあの女中部屋の中にあった。それに彼にはよく分っていた、もっと深く考えてみれば、それは〔ここで問題になっているのは〕まだ彼の母〔そのもの〕ではないことを、彼女は、大層ゆっくりと、そして重々しく築かれてゆくこの新しい彼自身に彼が対立するのを援けるためにだけそこにいるのだということ。今のところ彼女は道具でしかなく、彼は彼女を使って〔新しい〕彼自身と彼とをとりまいてるものに対してしているのだ。反抗が成就したとき、彼は暖かい気持で(?)彼自身のうちで育っているあの不可思議な花を見出すのだ。すでに彼には分っていた、彼の母は象徴でしかないことが。彼女の背後には思い出が山とひしめいていたのだ。彼女はかつてはあんなにも辛かったが今では理解されその価値に従って判断された、あの悲惨な生活の反映だった……」<sup>126)</sup>

まず、「彼〔息子〕」を「母」から「隔て」、「遠ざけ」る手助けをするものが、「知性」であり「本」であると言われている。それは〈父〉への道を示すものだ。だが、彼の「生きているもの」、彼の「心」は「母の働いているあの女中部屋」に、母のもとにあるという。それは、〈父〉への道を放棄することのように見える。息子は母を「道具」とし、母の「援け」を借りて、「知性」と「本」によって築かれてゆく「新しい彼自身」に「対立」する、つまり〈父〉に「反抗」すると言っているのだ。

だがそうではない。それは、「彼の母」自体に、そしてそこだけに回帰してゆくことを意味しているのではない。「本」を、「知性」を放棄して、「あの不可思議な花」に魅惑され、「母」の「炎の輪」<sup>(103)</sup>の中に自らを封じこめることを意味しているのではない。それは、「象徴」としての「母」に出会う道なのであり、「母」が「象徴」する「山」なす「思い出」に出会い、それらを「理解」し、それらの「価値に従って判断」することへの道なのである。

「自分の生活を自分の母から離れて作り上げていた」<sup>127)</sup>というだけでは、真に息子を「母」から「別つ」に十分ではない。さらに、「母」を排除し、「遠ざけ」というだけでは、息子が自分を母から「別つ」ものとしている「こうした生活の安楽さや書物」の「むなしさ」<sup>128)</sup>を生み出すだけである。やがて「むなしさ」ゆえに、「彼の魂の底で眠っている」「何ものか」<sup>129)</sup>に呪縛され、とらえ込まれるだけであろう。そうではなくて、虎穴に入らずんばの譬のように、一度は「彼自身」の防壁を越えて、危険な「不可思議な花」へと向かい、言葉を以て「彼の母」を「象徴」の次元にもたらし、母との関係が織り成していた「心の奥のあいまいもことした結びより」を、「何ものか」を、それが「匿している」「はるか以前に耳にした言葉とか、母のあれこれの姿勢とか、今は消えていったあれこれの運命とか」<sup>130)</sup>として読み「解く」ことによってのみ、「自分の母」を「理解」と「判断」の地平、つまり言葉の地平にもちきたるべき、「そうしたこと一切の象徴」<sup>131)</sup>とすることによってのみ、アルベールの真の「解放」は可能なのであり、ジョルジュとは異なって、アルベールの「知性」と、そしておそらくは並外れた意志の力がそれを可能ならしめてゆくのである。

(第2章終り)

〔注〕

- 87) 引用箇所直続する( )内の数字は以下のテキストのページ数を示す。André de Richaud, *La douleur*, 1968, Robert Morel.
- 88) Herbert R. Lottman, *Albert Camus*, 1978, du Seuil, p. 39. 以下、同書からの引用の訳文は、若干の用字変更などを除いて、ほぼ既訳(『伝記 アルベール・カミュ』大久保敏彦・石崎晴巳訳、清水弘文堂、1982年)のまま。
- 89) *Ibid.*, p. 442.
- 90) Carl A. Viggiani, «Notes pour le futur biographe d'Albert Camus», *Revue des Lettres Modernes*, n<sup>os</sup> 170-178, 1968, p. 206.
- 91) Lottman, *op. cit.*, p. 31.
- 92) *Ibid.*, p. 43.
- 93) *Ibid.*, p. 41.

- 94) Albert Camus, *L'Étranger*, Gallimard, 1942, p. 144.
- 95) Albert Camus, «*Rencontres avec André Gide*», [1951], *Essais*, 1965, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, p. 1118.
- 96) Albert Camus, *Les voix du quartier pauvre*, in *Cahiers Albert Camus 2*, 1973, Gallimard, pp. 273-274. なお、訳出に際しては、既訳(アルベール・カミュ『直観』高島正明訳, 新潮社, 1974年)を参照し、そのまま使わせていただいているところもある。
- 97) Albert Camus, *L'envers et l'endroit*, 1958, Gallimard, pp. 68-70. 訳出にあたって、既訳(『新潮世界文学48』『カミュ I』所収、『裏と表』高島正明訳, 1968年, 新潮社)を参照し、活用している。
- 98) *Ibid.*, p. 67.
- 99) *Ibid.*, p. 70.
- 100) Lottman, *op. cit.*, p. 36.
- 101) Camus, *Essais*, p. 1190, note de p. 27.
- 102) Camus, *Cahiers Albert Camus 2*, p. 271.
- 103) Lottman, *op. cit.*, p. 58.
- 104)-105) Albert Camus, *Cahiers Albert Camus 1: La mort heureuse*, 1971, Gallimard, p. 219.
- 106) Lottman, *op. cit.*, p. 53.
- 107) Camus, *Essais*, p. 1214.
- 108) Lottman, *op. cit.*, pp. 54-58. 参照。
- 109) Camus, *Essais*, p. 1214.
- 110) *Ibid.*, pp. 1214-1215.
- 111)-114) *Ibid.*, p. 1215.
- 115) Bernard Pingaud, *L'Étranger de Camus*, 1971, Hachette, p. 76.
- 116) Lottman, *op. cit.*, p. 62.
- 117) Viggiani, *art. cit.*, p. 204.
- 118) *Ibid.*, p. 205.
- 119) Lottman, *op. cit.*, p. 39.
- 120) *Ibid.*, p. 44.
- 121) *Ibid.*, p. 46.
- 122) *Ibid.*, p. 34.
- 123) *Ibid.*, p. 35.
- 124) *Ibid.*, p. 34.
- 125) Camus, *L'envers et l'endroit*, p. 54.

126) Camus, *Essais*, p. 1214.

127)-131) *Ibid.*, p. 1213.